

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 25 号, 2022 年, 括刷 (pp.89-93)

<書評>

関雄二監修 山本睦、松本雄一編

『アンデス文明ハンドブック』

加藤泰建 (埼玉大学)

Seki, Yuji, Atsushi Yamamoto, Yuichi Matsumoto eds.,

Handbook of Andean Civilization

Yasutake Kato (Saitama University)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』25, 2022, pp.89-93

<書評>

関雄二監修 山本睦、松本雄一編

『アンデス文明ハンドブック』

京都、臨川書店、2022年、390頁、定価3400円+税

加藤泰建

(埼玉大学名誉教授)

1. 『アンデス文明ハンドブック』の構成と内容

本書は、紀元前4000年から紀元前後までの形成期を扱う第I部「神殿と共に生きた人々」と、その後16世紀までを扱う第II部「アンデスにおける国家と帝国」および第III部「現代社会とアンデス文明」で構成され、それぞれ9章、7章、3章からなっている。各部の始めに編者による序の文章があり、全体像を把握するための適切な解説がなされている。各章は時代や地域別ではなく最新の研究課題に即したテーマによって配列されておりタイトルにも工夫がこらされている。各執筆担当者は自分自身の調査研究によって得られた具体的なデータを用いて記述している。本書は研究論集ではないが、章のタイトル名と執筆者名を明記し、調査地名なども意味のある情報として記すことにする。なお、地名はとくに断らない場合はペルーである。

第I部の序「形成期という時代、神殿更新論という視座」では、長年にわたり日本の研究者が取り組んできたアンデス形成期の研究を概観し、実践理論の枠組みなどから考えるという新しい方向性を提示している。

第1章「巨大建造物はなぜ、どのように生まれたのか」では、土器製作以前の大規模神殿の出現をめぐる問題が取り上げられている。北海岸チカマ川流域沿岸部のクルス・ベルデ遺跡を調査した莊司一歩が、海産物資源の利用戦略は前4000年頃に大きく変化したという実証データを示し、この時期にエル・ニーニョ現象の規模と頻度が増加したと説明する。この変化に連動して、以前は食糧残滓をただ捨てていたのに、廃棄後の上面を整え、粘土質の床で覆うようになる。この繰り返しでマウンドが形成されてモニュメントの萌芽になったという。

第2章「神殿を建て続けた人びと」では、北部ヘケペケ川中流域の発掘調査を続けてきた鶴見英成がアマカス平原で確認された形成期神殿群の時期差と立地に着目する。前期（前1500 - 前1250年）の五つの神殿は順に西から東に向かって場所を移し、前の時期の神殿を眺望する位置に築かれしていく。この移転は祖先崇拜と関連していたと説明する。しかし中期（前1250年 - 前800年）のラス・ワカス神殿では別の設計原理が働き、移転せずに同じ場所で神殿更新が繰り返されるようになり、やがて大きな神殿複合になったという。

第3章「社会の核としての神殿」で扱われるのは北部ヘケペケ川上流の大神殿遺跡クントゥル・ワシの事例である。15シーズンにわたり発掘に携わってきた井口欣也が調査結果を簡潔にまとめている。ここでは前950年に最初の神殿が造られ、前800年には大きな革新が起こって大規模な神殿となった。前550年以降になると

部分的増改築が繰り返されて神殿が変容し、やがて前 250 年ごろに放棄された。このようなクントゥル・ワシ神殿の変容過程は、下流域にある北海岸社会との交流が契機となり、やがて、より広い領域にわたる地域間交流がさまざまに展開する中で生じていた。交流の動機は遠隔地の様々な希少資源の獲得であったという。

第4章「人を結びつけ、切り離す神殿」では、長年にわたり北高地の神殿遺跡ワカロマ、クントゥル・ワシ、パコパンバなどの発掘調査を手がけた関雄二が形成期の神殿をめぐる研究課題を、チャビン・デ・ワンタルなどの関連遺跡の研究成果も踏まえて、わかりやすく説明している。形成期には神殿を繰り返して造り替えていく神殿更新という反復的実践が人々を結びつけていたが、形成期後期（前 700 年 - 前 500 年）に幾つかの大神殿で明確なリーダーが出現して社会が階層化する。神殿が権力生成の場となり社会の分断化をもたらすのである。しかし、神殿をめぐる社会の複雑化とその要因は一様ではなく地域毎に差があったという。

第5章「神殿と人、神殿と動物」では、北高地のパコパンバ神殿遺跡の発掘で得られた膨大な獸骨資料の分析から、動物考古学者の鵜澤和宏が、神殿における動物利用が変化していく実態を読み解いている。とくに形成期後期になるとシカの幼獣が選択的に消費される傾向が見られることから、経済的な合理性より儀礼などの祭祀目的が優先されたことに注目する。また、同じ時期にリヤマが飼育されるようになるが、やはり、幼獣が犠牲として捧げられ、あるいは神殿での饗宴に供されていたという。

第6章「神殿と饗宴」では中川渚が、神殿遺跡の特定の場所に数多くの土器片や獸骨、炭化物などが集中する饗宴の痕跡に着目し、自らが発掘に参加したパコパンバ神殿の例も含めて八つの遺跡の事例を比較している。饗宴跡に残された土器などの遺物構成は時期によってはつきりした違いが認められたという。この結果から、形成期中期の饗宴は神殿更新などの共同労働に伴う飲食で人々の社会的つながりを強化する役割があったが、形成期後期になるとエリート層が権威を示す目的で儀礼的な色彩の強い饗宴を主催するようになり、社会的な差異を生みだす要因の一つになったと説明する。

第7章「儀礼としてモノをつくる」では、荒田恵がパコパンバ神殿遺跡の発掘調査で出土した膨大な量の工芸品資料の分析結果を提示する。威信材となるような装身具や儀礼用品は神殿域内の特定の広場からまとまって出土する傾向があり、しかも原材料や加工途中の未完成品、残滓などを伴っている。これは神殿が儀礼行為として装身具などを製作する場になっていた証拠であるという。パコパンバ遺跡では銅製品が他の神殿遺跡と比べて数多く出土する。鑿などの道具や粗銅、銅鉛滓などの材料も確認されている。この神殿では、希少財である銅製品の生産と流通の管理がエリート層の権力基盤になっていたと説明する。

第8章「神殿は何を伝えたのか」では、芝田幸一郎が形成期神殿の装飾に込められたメッセージを読み解く。芝田は、北部中央海岸ネペニヤ河谷下流部のワカ・パルティーダ遺跡で四層の段状構造からなる神殿を発掘し、形成期中期に対応する外壁面から保存状態が良好な彩色レリーフ像を発見した。鳥の像が見られる最上段は天上界、ジャガー像が描かれた三段目は地上界とみなせる。その間の二段目を飾っている有翼の人物像が天と地を媒介する宗教的指導者である。このように、段状構造の神殿全体で一つの世界を表現していたという。

第9章「周縁の神殿ではなにがおきていたか」では、南の周縁地域とされる中央高地南部のカンパナユック・ルミ神殿を発掘調査した松本雄一が、大神殿チャビン・デ・ワンタルとの約 500 年にわたる関係をあきらかにする。中心地にある大神殿が周縁地域に産出する黒曜石などの希少資源を獲得する目的で支配下に置くという一方的な関係ではなく、周縁地側の神殿にも主体性や能動性のある相互的な交流関係であったという。一方、北の周縁地域、北高地ワンカバンバ谷インガタンボ遺跡を発掘した山本睦が、前 1000 年ごろ大神殿パコパンバの強い影響によって築かれた神殿が前 800 年以降は別の大神殿クントゥル・ワシとの関係を強めたことを示す。ここでも周縁地の神殿は従属的に支配されるのではなく交流の相手を戦略的に選択していたという。

第II部「アンデスにおける国家と帝国」には「国をつくった社会とつくりなかつた社会」という副題がついている。アンデス文明の国家社会といえばインカ帝国のほかモチエ、ワリ、ティワナク、チムーなどがあげられる。普通はこれらの国家社会の盛衰を中心とした歴史を扱うことが多いが、本書ではむしろ国家に統合された側の社会あるいは狭間の社会の実態から国家を論じる点に特徴がある。

第10章「ナスカの地上絵をめぐる景観と土器の儀礼的破壊」で坂井正人が扱うのは近年大きな成果を上げている山形大学によるナスカの地上絵についての研究成果である。調査ではあらたに多くの地上絵が発見され、関連する一万点以上の土器片が収集された。これらの土器は地上絵の特定の場所で儀礼的に破壊され棄てられたものであり、その分析から、地上絵がいつ、どのように利用されたのかがわかる。この章では、形成期末の前400年から1世紀以降のナスカ前期、中期、後期の各時期において、それぞれ地上絵の利用が変化していく実態が示され、およそ1000年にわたるナスカ地域の社会動態があきらかにされる。

第11章「小さな集落からみたワリ帝国の支配」では、土井正樹が7世紀から10世紀にペルーの広い範囲に影響を与えたワリ帝国を扱う。近年の調査研究によってワリ帝国の実態解明はかなり進み、その中心は中央高地南部アヤクチョ谷のワリ遺跡にあったことがわかっているが、土井が発掘したのはワリ遺跡から10kmほど離れたトリゴパンバ村にある三つの小規模遺跡である。帝国の首都近郊にあたる場所で国家に統合される前後の一般の人々の具体的な生活の変化を分析することにより、国家による支配とは何かを考察している。

第12章「宗教国家」ティワナクでは、佐藤吉文が、ペルー南部からボリビアにかけての高原地帯において大きな影響力を持った国家ティワナクを扱う。その中心地はティティカカ湖南岸にあるティワナク遺跡であるが佐藤が発掘調査を行っているのは周辺のパレルモ遺跡である。ティワナクでは公的な国家儀礼のほかにインフォーマルな儀礼の痕跡が多く残ること、さらに、首都から離れた地方では様々な儀礼が行われていたことに着目し、ティワナクは多元的かつ重層的な構造を持つた宗教的色彩の強い国家であったと論じている。

第13章「建国しなかつた人々」では北高地のカハマルカ地方に焦点があてられる。カハマルカ盆地で幾つかの主要な遺跡の発掘調査に携わってきた渡部森哉は、形成期神殿が放棄されて以降、白色粘土を用いた独特のカオリン土器製作伝統がおよそ1600年にわたって持続したことにも注目する。カハマルカではワリ帝国期に行政センターが設置されたし、インカ帝国期にもその支配下におかれることがあったが、内発的に政治的中央集権体制が構築されることはない。一時的に外部からの帝国的支配に組み込まれても独特的対応によって伝統を保持し続けたという。

第14章「北海岸に花開いた多民族国家」では北海岸の国家社会が取り上げられる。この地方では2世紀ごろに複数政体が緩やかに連携した国家社会のモチエが現れ、14世紀には単一の権力基盤による統一国家チムーが登場する。松本剛は、この二つの国家社会の狭間にあたる8世紀から10世紀のランバイエケ社会に注目する。その中心はシカン遺跡で、この発掘調査に加わった松本は埋葬儀礼や祖先崇拜のあり方からランバイエケ社会を解説しようとしている。ランバイエケは以前の王国の民モチエも含め四つの異なる民族からなる複雑な社会構成の多民族国家であったという。

第15章「モニュメントなき都市」では浅見恵理が中央海岸北部のチャンカイ社会をとりあげる。ここは北方に大國家チムーがあり、南は宗教的中心地パチャカマック神殿のあるイチマ社会と接していた。住居が密集する都市型遺跡が幾つか見られるが、モニュメンタルな建造物は確認されていない。浅見はチャンカイ谷中流域にある都市遺跡サウメで発掘調査を行い、建築の通時的変化から独特な都市の在り方を解説しようとしている。チャンカイ社会は二つの大きな国家の間にありながら双方からの影響はあまり受けず、少なくとも文化面ではチャンカイ様式と呼ばれる独特の土器や織物の製作で強い独自性を保っていたという。

第16章「インカとは誰か?」では、カハマルカ地方でインカ期の遺跡調査を行ってきた渡部森哉が考古学者の観点からインカ帝国を取り上げる。征服者スペイン人は多くの記録文書を残しているが、それは支配者であったインカを中心に書かれている。これまでの研究ではインカを一元的に捉えるものが多いが、実際のインカ帝国は80以上の民族集団を抱える多元的な社会であった。これらの民族集団の多様な実態や支配者インカとの具体的な関係を知るには記録文書だけでは不十分で考古学調査が必要であるという。

第III部の序のタイトルは「考古学は過去だけを対象とするのではない」という含意のある表現になっている。ここでは考古学は何を扱うのかという本質的な議論が取り上げられ考古学調査と現代社会との関わりについて触れられる。

第17章「パブリック考古学の実践」では、サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテがパブリック考古学という新しい研究分野について紹介し、実際に自分が携わっている研究の事例から解説している。遺跡や遺物は、これまで考古学者が発掘して価値を与え、意味づけてきたが、現代社会にあっては文化遺産として価値が付与され、研究者だけではなく、様々な立場の人々が多様なアクターとして関わりを持ってくるという。つまり、考古学は研究者だけではなく完結しないのである。また、考古学者は文化遺産に関する国家の管理体制について十分に理解することが必要であると説く。

第18章「ナスカの地上絵の学術調査と保護のあり方」では、2004年からナスカの地上絵について山形大学で研究チームを組織して学術調査を進めている坂井正人が、研究と密接にかかわる地上絵の保護活動についての解説を行っている。山形大学の研究チームは現地においてナスカ研究所を設立し恒常的な活動を展開している。ユネスコの世界遺産に登録され、観光名所として知られる地上絵が、現在でも市街地の拡大などによって破壊されつつある現状について触れ、保護公園の設立が進められていることなどが紹介される。また地上絵を観覧するために新たに建設された展望台の意義などについて取り上げている。

第19章「遺跡保存における考古学者と地域社会の役割」では、これまで長い間にわたって遺跡調査と文化財の保存活動に携わってきた関雄二が、ワカラマ遺跡、クントゥル・ワシ遺跡、パコパンパ遺跡などの具体的な事例をあげて説明する。ここでは、考古学者は研究と文化遺産保存にどのように取り組むべきか、遺跡の周辺地域社会の住民たちとどのように協働すべきかという問題がとりあげられる。

このほかに、生物考古学者の長岡朋人による「生物考古学からみたアンデス最古の儀礼的暴力」、古人骨の同位体分析を専門とする生物考古学者瀧上舞による「アンデス文明における食料資源の獲得戦略」、建築考古学者の宮野元太郎による「デジタル技術による古代建築研究の新たな展開」という三つのコラムが掲載されている。

2. 日本語で書かれたハンドブック

ハンドブックといえばジュリアン・スチュワードが監修した『南アメリカ先住民ハンドブック』全7巻が思い浮かぶ。その第2巻が『アンデス文明』である [Steward ed. 1946]。アンデスの考古学研究はここから出発したといつてもよい。その後、アメリカ合衆国の研究機関が中心となり、社会進化理論の枠組みのもとで研究を発展させてきた。この半世紀以上も前の記念碑的書物を意識しつつ、現代の新しい研究動向を踏まえて刊行されたのがシルバーマンとイスベル編集の『南アメリカ考古学ハンドブック』である [Silverman and Isbell eds. 2008]。こちらのハンドブックは南アメリカの考古学を対象にしており、執筆陣には南米各国の考古学者も加わっているが、依然としてスペイン語やポルトガル語ではなく英語で書かれ、対象とする読者は英語圏の人々になっている。そして中央アンデスに関する部分については執筆者の多くはアメリカ合衆国の研究者で占められている。

これに対して『アンデス文明ハンドブック』は日本語で書かれ、20名の執筆者はすべて日本の教育研究機関に携わっている。この本はこれから専門的な研究を目指す日本の学生のための手引き書になっているのである。日本の初学者は多くの場合、日本語で大学教育を受けているし、アンデス文明の現地調査になればスペイン語が必須になる。研究を始めるにあたって英語だけが唯一の言語というわけではない。日本語でハンドブックが書かれたことの意義は大きく、長い間、合衆国を中心にして開拓してきた研究史の中では画期的なことといえる。

本書の執筆者の多くは1988年に始まったクントゥル・ワシ調査や2005年から続いているパコパンハ調査という日本の二つの大規模なプロジェクトに参加した経験がある。そのときに層位関係を重視した発掘方法と、土器資料と建築構造の分析によって遺跡毎の精緻な編年を確立することの重要性を学んできた。本書の各章において一つの遺跡における通時的な社会変化についての言及が多くなされるのは、遺跡の編年がきちんと確立しているからである。このような日本流の調査研究スタイルをきちんと評価し、継承していく必要がある。

本書の執筆者以外にも日本でアンデス考古学を研究している者はいる。研究者の層は着実に厚くなってきた。本書を読めばわかるように日本の研究者が自分たちの調査研究を中心にするだけでもアンデス文明のかなりの範囲をカバーできるようになっている。今や、日本の教育研究機関で次世代のアンデス考古学研究者を育成する条件は整ってきたといえる。

本書は初学者のためだけではなく、研究者にとっても重要な書物である。従来の文明史研究は、類似した事象をまとめて分布域や関連領域を括るのが一般的であったが、近年は研究の進展にともなって、時代や領域などの大きな括り方の妥当性も問われるようになっている。本書でも、多様性という視点の重要性がしばしば指摘されている。しかし多様で多元的な事象を全体としてどのように俯瞰するのか、その答えはまだ見えていない。アンデス文明史においては新しい研究の枠組みを構築することが求められているのである。研究者相互が本書に示された研究の到達点を共有し、あらたに研究を進展させるための土台とすることが必要であろう。

また、このハンドブックはアンデスを専門とする研究者だけではなくメソアメリカなど他地域の研究者にも読んでもらいたい。学会誌『古代アメリカ』に書評を投稿する意味はここにある。昨年、やはり、同じく多くの日本人研究者が執筆した概説書『メソアメリカ文明ゼミナール』が公刊されており、その書評が第24号に掲載されている〔青山2021〕。この二冊の書物を比較し、互いの研究の位置を確かめ合うことをぜひ勧めたい。

参考文献

青山和夫

- 2021 「伊藤伸幸監修 嘉幡茂、村上達也編『メソアメリカ文明ゼミナール』」『古代アメリカ』24:101-105
Silverman, Helaine and William H. Isbell (eds.)
- 2008 *Handbook of South American Archaeology*. Springer, New York.
Steward, Julian H. (ed.)
- 1946 *Handbook of South American Indians, Vol. II, The Andean Civilizations*. Bulletin 143, Bureau of American Ethnology, Smithsonian Institution, Washington, D.C.

原稿受領日 2022年7月15日
原稿採択決定日 2022年7月25日

